

『史泉』第81号 抜刷
一九九五年三月 発行

京都の空襲・学徒動員・工場疎開

謹呈

京都府立総合資料館 御中

田中 はるみ

20032013

京都の空襲・学徒動員・工場疎開

田中 はるみ

はじめに

太平洋戦争末期、アメリカ軍による日本本土空襲は激烈を極めた。東京、横浜、名古屋、大阪、神戸と次々に大都市は廃墟と化していき、中小都市も爆撃にさらされていた。

その中で、京都は「極部的ナ被害ノ中ニ終戦トナリタル」^(ママ)①状況で、ほかの大都市とくらべて被害が少なく、焼け残った都市の代表といえる。

では京都の空襲は、アメリカ軍による日本本土への戦略爆撃の過程でどのように位置づけられるのか。上空の意図と地上の体験は一致するのか。アメリカ側の資料と日本側の資料を検討することで、京都の空襲の実相にせまってみたい。

本稿でいう京都の範囲は、京都市と当時洛南とよばれていた京都府南部地域である。

ここ十年來の京都空襲論、京都の空襲研究における欠陥をよく表している例として、一九四五年六月二六日の空襲をあ

げることができるとする説は、容易に消滅しないようである。

最近では『朝日新聞』（南京都版）一九九四年八月二〇日付で「通説を覆す『西陣空襲』」として、次のような記事が掲載されている。

「文化財を守るため、京都は爆撃目標にならなかつた」。信じられてきた説を覆す資料がある。「東京大空襲戦災誌」に収められている米軍第二〇航空軍司令部の文書だ。それによると、四五年六月二五日午前零時四〇分（米軍使用時刻、日本時間では二六日午前九時四〇分）、目標を京都に設定したB29一機が高性能爆弾七発、七トンを投下した。

これは、明らかに誤りである。『朝日新聞』のいう資料とは、第二〇航空軍が作成した「日本本土爆撃詳報・地域別」（『東京大空襲戦災誌』第三卷所収、一九七三年）のことであるが、これは、第一目標、第二目標、最終順位目標、臨機目標の別なく、B29の搭乗員が投弾したと報告した地域名が

記されているのである。本土爆撃を日付順に記載した「日本本土爆撃概報・日付順」(『同右書』所収)には、六月二六日、京都への爆撃の記録はない。第一目標のみに限定した資料だからである。なおこの誤りは、吉田守男「京都小空襲論」(日本史研究会『日本史研究』二五二号所収、一九八三年七月)に端を発したものであり、さらに小林啓治・鈴木哲也『かくされた空襲と原爆』(機関紙共同出版、一九九三年)へと引き継がれた。六月二六日の空襲が大空襲の付随的、投棄的爆撃であることは、本稿で明らかにしたい。

さらに四月一六日空襲の三菱重工業第十四製作所、七月二四日空襲の日本国際航空工業大久保工場に動員されていた少女たちの姿も掘りおこしてみたい。また三菱重工業、日本国際航空工業という軍需工場建設のために徴用された朝鮮人たちの姿にもふれる。そして京都の空襲で最も影響を受けた三菱重工業の工場疎開について、検討をおこなう。

一 空襲

「京都府当局は、一九四五年一月から八月にかけての一六の小空襲を報告した」として、米国戦略爆撃調査団報告「京都における空襲防ぎよと関連事項に関する現地報告」^②に、次のような内容の一覧表が掲載されている。

日付	時刻	機数	爆弾	被害
1・16	二三時	B 29 一機	高性能爆弾およそ六〇	焼夷弾一。死亡三四人、重傷二三人、軽傷二三人。建物二棟全壊、二九棟焼失、二二棟一部火災。
1・29	二一時五分	B 29 一機	高性能爆弾五	死傷者なし。
2・4	〇時三五分	B 29 一機	高性能爆弾およそ八三	死傷者なし。建物一棟全壊、一棟一部損傷。
3・19	七時	グラマンおよそ一九機	高性能爆弾一一	建物一棟全壊。死傷者なし。
3・19	七時三〇分	グラマンおよそ一四機	高性能爆弾一	重傷一人。建物一棟全壊。
4・16	一二時	B 29 一機	高性能爆弾七	死亡二人、重傷二人、軽傷三七人。被害なし。
4・22	九時五〇分	B 29 一機	銃撃	重傷二人、軽傷一人。
5・11	九時	数は未確認だが B 29 による銃撃		軽傷二人。
6・5	八時	B 29 一機	銃撃	死亡一人、重傷一人、軽傷七人。
6・9	九時三〇分	B 29 およそ一一〇機	銃撃	死亡一人。
6・15	B 29 およそ一五機	焼夷弾一〇九七		建物二五棟完全焼失。
6・26	九時四〇分	B 29 一機	高性能爆弾六	死亡四三人、

重傷一三人、軽傷六三人。建物六五棟全壊、八四棟軽い損傷。

第九波 一四五機、死亡二人。建物一棟完全焼失、二棟一部焼失、一棟全壊。

7・19 九時三〇分。P51一三機、銃撃。死亡二人、重傷一人、軽傷六人。

また日本側資料としては、京都府警察部警防課が一九四五年六月にまとめた「空襲被害一覧表」^③がある。これには、京都府当局が米国戦略爆撃調査団に報告したとされる「京都府の空襲」の一覧表に記載のない一月二三日、四月七日、六月

7・24 七時五〇分。P51およそ一五機、高性能爆弾四。死亡七人、重傷四人、軽傷一人。

一日の爆弾投下の記録が残っている。空襲時刻・被害状況について内容が異なる場合がある。今までの京都空襲研究者は、もっぱらこの府警防課の一覧表を引用している。そして、

第二波 P51およそ一五機、高性能爆弾五。死亡七人、重傷二人、軽傷一二人。建物一棟全壊、二棟一部損傷。

米国戦略爆撃調査団報告の方を見ていない。だが、アメリカが戦略爆撃の効果を調査していた時期に、京都府当局がこのような空襲の報告をしていたのは事実なのである。

7・28 一三時三〇分。P51六機、銃撃。重傷三人。
7・30 一二時一三分。小型機およそ二〇機、銃撃。軽傷一人。

米国戦略爆撃調査団報告「大阪、神戸、京都に対する空襲の影響」^④には、京都への空襲について、アメリカ側としては「航空写真を撮影する任務以外、京都への空からの軍事行動の計画はなかった。しかし偶然の事故によるものか航空上のトラブルによるものかわからないが、いずれも単機によって、死傷者を出し、建物を破壊する爆弾投下が三度あった」として、一月一六日、四月一六日、六月二六日の空襲にふれている。

第二波 小型機八機、銃撃。死亡二人、重傷一人、軽傷一人。建物一棟一部損傷。

「航空写真を撮影する任務以外、京都への空からの軍事行動の計画はなかった。しかし偶然の事故によるものか航空上のトラブルによるものかわからないが、いずれも単機によって、死傷者を出し、建物を破壊する爆弾投下が三度あった」として、一月一六日、四月一六日、六月二六日の空襲にふれている。

第三波 小型機一機、銃撃。軽傷三人。

第四波 小型機およそ一七機、銃撃。死亡一四人、軽傷九人。建物六棟完全焼失、二六棟軽い火災。

第五波 小型機一七機、銃撃。重傷二人、軽傷一人。

建物一五棟完全焼失。

第六波 五機、軽傷二人。

第七波 七機、軽傷一人。

第八波 五機、軽傷一人。

アメリカ軍の当初の意図とは関係なく、偶発的に行われたとされる空襲について、四月一六日、六月二六日の両空襲の